艦魂異聞禄　～Old Ironsidesの名を冠する帆船～

流水郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
艦魂異聞禄　～Ｏｌｄ　Ｉｒｏｎｓｉｄｅｓの名を冠する帆船～

【Ｎコード】
Ｎ７７２５Ｆ

【作者名】
流水郎

【あらすじ】
１７９７年進水、数多くの激戦を勝ち残り、２００年に渡ってアメリカを見守り続けてきた船が、１１６年ぶりの航海に出る。“彼女”の目に、今の海はどう映るのだろうか……？日本の三笠、イギリスのヴィクトリーと並び称される『世界三大記念艦』の一隻にして、今なお就役中の帆船にスポットを当てた艦魂小説です。

プロローグ

世界は変わった。

海も。

空も。

戦も。

人も。

船も。

全てが大きく変わった。

否、変えられたのかも知れない。

自力で海を走るのは、１１６年ぶり。

私と共に戦った者達は、もうこの世にはいない。

我ら帆船が主役の時代はとうの昔に過ぎ去り、

空には鉄の鳥が飛び交い、

一瞬で街を灰にする兵器も生まれた。

それでもまだ、この国は私を必要としているのか。

ならば、良かろう、我が目で確かめよう。

今のこの海と、戦士達の姿を。

我が名はコンスティチューション。

２００年の長きに渡り、この国を見守ってきた者……

……

第1話　1997年…舞い込む知らせ（前書き）

どうも　！

誰も書かないような艦魂を……ってなことで、いっそのこと帆船にしてしまおうと思いました。

伊四〇〇の最後で、鏑木の孫に絹海の手紙を渡した艦魂の話です。

第1話　1997年…舞い込む知らせ

……1997年……

アメリカ海軍ミサイル駆逐艦『ラメージ』。
その船内の一角に、1つの扉があった。
普通の人間には見えないその扉の向こう側には、合衆国海軍の戦乙女達が集っていた。

「いやー、全く」

「近頃うちの艦長がさー」

「お茶菓子切れたから、持ってくるわね」

テーブルを囲み、チョコレートやクッキーなどを食べながら雑談する彼女たち。
これが軍艦に宿る魂の姿と言われても、信じる者はいるだろうか。
いや、そもそも見ることができる者すら、限られているのだが。

その時、扉がバタンと開いた。

「邪魔するぜ」

入ってきたのは、日焼けした若い人間。
ラメージの乗組員のようで、下士官の服装をしている。

髪の毛や肌の色などは、モンゴロイドに近い。

「ちょっとオスカー軍曹、ノックぐらいしてって言ってるでしょ！」

艦魂の1人が抗議する。

金色に輝く長髪といい、その体つきといい、非常に魅力的な容姿だ。しかし、どことなく子供のような雰囲気のこの少女が、ラメージの艦魂だ。

「本当なら、私たちの大事な会合に人間が来ることすら、禁止なんだからね！」

「あのなラメージ、大事な会合って、ただのお茶会じゃねーかよ」

オスカーと呼ばれた下士官は、呆れたように指摘した。

「とにかくな、お前に任務が出たことを伝えに来たんだ。ありがたく拝聴しろ」

「……任務！？」

ラメージの目が見開かれた。

「ラメージに任務ですって？」

「何なの？　何処に出撃するの？」

他の艦魂たちもざわめく。

「ど、どうしよう、任務なんて……ねえ、誰と戦うの　？　何処で戦うの　？　」

ラメージは震えながら、オスカーにすがりつく。
やはりまだ子供なのだなぁ、とオスカーは思った。

「安心しろ、戦うわけじゃないし、至極安全な任務だ」

「そ、そっか。じゃあ、何をやるの　？　」

他の艦魂も、オスカーの方をじっと見て、言葉を待っている。

「お前、『コンスティチューション』って船、知ってるか　？　」

その言葉に、ラメージは顔を紅潮させた。

「知ってるわよ　！　私たちにとっては神様と同義だもん　！　」

馬鹿にされたと思っての怒りだ。

「ああ、言い方が悪かった。で、その『コンスティチューション』が、生誕２００年を記念してだな、１１６年ぶりの航海に出ることになった」

「へえ　！　凄い　！　」

「それと、何の関係があるのですか　？　」

「もったいぶらないで教えてよ」

尋ねられ、オスカーは大事な部分を口に出した。

「ラメージよ、お前がその護衛をするんだ」

それを聞いて、ラメージの顔が強張った。

他の艦魂たちも固まる。

「護衛というか、付き添うだけだ。お前と、ミサイルフリゲートの『ハリバートン』が……」

「ななななな、何で　！　？　何で私なの　！　？　無理だよ無理無理　！」

ラメージは最早、完全にパニック状態だった。

それほどまでに、『コンスティチューション』という船は、彼女たちにとって大きな存在なのである。

「まあ落ち着けよ。ただ一緒に航海するだけだから」

「それだけでも大変なことだよ　！　海軍の守護神だもん　！　どうしようどうしよう、ねえどうすればいいの　！　？　」

ラメージにしがみつかれたオスカーは、その肩を軽く叩いた。

「でーんと構えてればいいんだよ。お前はＰａｒ　Ｅｘｃｅｌｌｅｎｃｅな艦だ。かならずやり遂げられる」

Ｐａｒ　Ｅｘｃｅｌｌｅｎｃｅ……飛び抜けたもの、という意味だ。

それは即ち、駆逐艦『ラメージ』の標語である。

「ほ、本当に　？　本当にそう思う　？　」

「ああ。俺もできるだけバックアップするからよ」

「そうよラメージ、頑張りなって」

「貴女ならできるわよ」

艦魂たちも、ラメージを励ます。

「よ、よーし……私、頑張るね　！　」

「おう、その意気だ」

オスカー＝ボイントン軍曹は、艦魂が見える貴重な人間で、海軍ではラメージの兄貴分のような存在だ。
常にこうしてラメージを励まし、勇気を与えるという、非常に重要な役割を果たしている。
もっともそれを知る者は、艦魂たちしかいないのだが。

……

……ボストン港……

かつてアメリカ海軍の伝統だった、黒い船体。

立ち並ぶ3本の帆柱に、４４門の砲。
２００年経っても、色あせない威厳。
１７９７年に進水したフリゲート『ＵＳＳコンスティチューション』。
フランス、イギリス等との戦争で華々しい戦果を挙げ、敵艦の熾烈な砲撃を耐え抜いたことから『古い鉄の船腹（オールド・アイアンサイズ）』の異名を持つ。
やがて海戦の主力が帆船から蒸気船に変わった後も、現在も現役で海軍に所属している、アメリカ海軍のシンボルである。
１９９２年から１９９５年で分解修理を終え、この船は１１６年ぶりに、自力で航海に出ることとなった。

船内の『ある部屋』の中。
質素な装飾の施された木製の机を挟み、１人の水兵と艦魂が、チェスをしていた。
水兵はまだ若い男で、がっしりとした体つきだ。
対する艦魂の方は、古風なデザインの軍服を着こなした女性。
ウェーブのかかった茶色い長髪に、深い緑色の目。
体つきも豊かで、１０人中１０人が振り返るであろう美女だ。
しかし、それだけではない。
何か普通の艦魂とは違う、不思議な神々しさと威厳を持っていた。
彼女こそが、この船……コンスティチューションの艦魂だった。
椅子の手すりに頬杖をつきながら、彼女はおもむろに、黒のナイトを進める。

「……チェックメイト」

コンスティチューションは微笑を浮かべた。

「……参りました」

「そなたも、なかなかやるな」

「閣下には敵いません」

水兵は苦笑した。

「貴女様ほどになると、あらゆる手を知り尽くしておられるでしょう」

「まあ船は老いても、私の智と勇は健在じゃの。大抵の手は読める」

そう言って、コンスティチューションはふと切なげな顔をした。

「……だがな……この国の行く末は読めぬ……」

「行く末……」

「私が戦っていた頃には、見えたのだ。合衆国の輝かしい未来がの。しかし今は、星条旗も輝きの失せた星にしか見えぬ」

「また、戦場へ戻りたいと　？　」

水兵のその言葉に、コンスティチューションは驚いたように目を見開いた。

数秒後、愉快そうに笑う。

「ハハハハ……ハハ……そうか、そのようにも聞こえるな」

「は、失礼いたしました」

「仮に万が一、再び帆船の時代が来たとしても、あの頃の海戦は戻らぬよ」

コンスティチューションはグラスに注がれた酒を、すーっと喉に流し込んだ。

「私が憂えているのは、別の部分……。明日、私をエスコートする艦は何と言ったかの？」

「駆逐艦『ラメージ』と、ミサイルフリゲート『ハリバートン』です」

「ふむ……その者たちの心を、確かめてみるか」

……翡翠の如き緑の瞳は、何が映しているのか。

それを知る者はいなかった。

第1話　1997年…舞い込む知らせ（後書き）

…

ラメージ
米海軍駆逐艦『ラメージ』の艦魂。
一見生意気だが、実は弱気。
彼女が見える乗組員のオスカーや、その他の艦魂たちからも可愛がられ、愛されている。
よくパニックになるが、一度やると決めたら引き下がらず、迷わないという芯のしっかりとした一面もある。

さて、第1話はまだ、ラメージとコンスティチューションの顔見せみたいな話になりました。
次回、コンスティチューションの過去の戦いを書きます。

蒸気船が発達し、帆船が時代遅れとなった時代に解体されかけるも、国民の声によりそれを免れたという、「愛された船」コンスティチューション……。
単に古いというだけでなく、戦果も凄まじいです。
風を受けて海上を走っていた彼女は、今の近代兵器をどう思っているかな、などと考えて書きます。

第2話　過去…米英の死闘（前書き）

遅くなりました、第2話です（汗）
それほど過激ではないと思いますが、流血シーンが多少有りますのでご注意下さい。

第2話　過去…米英の死闘

……１８１２年８月１９日　ノバスコシア海岸……

黒き船体に、雄々しきマストの立ち並ぶ帆船。
その船尾に、指揮官の軍服に身を包み、サーベルを帯びた少女が立っていた。
凛とした顔立ちに優雅な肢体、そして緑色の双眸は、水平線の向こうを見つめる。

「おい、コンス」

後ろから乗組員の１人が、彼女に声をかけた。
砲手の１人である。

「砲から離れていいの　？　フレッド」

「すぐに戻るさ。リンゴ貰ってきたが、食うか　？　」

「後でちょうだい。今はいつ敵船が来るか、分からないから」

少女……ＵＳＳコンスティチューションは言う。

「船の妖精も大変だな」

「合衆国の未来がかかった戦ですもの。でも貴方は、気乗りがしないみたいね」

フレッドと呼ばれた砲手は、自分のリンゴを一口囓って頷く。

「イギリスは気に入らねぇ。だがよ、インディアンが向こうの味方についてるんだ」

１８１２年、アメリカとイギリスとの関係が険悪化し、６月にこの米英戦争が始まった。

アメリカ人に土地を侵略されていたインディアンの諸部族は、当然イギリスに協力し、白人の支配に抗戦の姿勢を表している。

「先住民くらい、別に驚異ではないでしょ　？　」

「そういう問題じゃねぇ」

フレッドは言った。

「俺等はよ、自由に暮らせる新天地を求めて、アメリカの土を踏んだ。インディアンは俺等に、ここで生きる術を教えてくれた。それなのに今は……」

「フレッド」

コンスティチューションは、人差し指を立てて唇に当てた。

「聞いてるのが私だけだからいいけど、あんまり大声で言ったら駄目よ」

「……そうだな」

……その時、船上に怒号が響き渡った。

「敵艦発見　！　総員戦闘配置　！」

フレッドとコンスティチューションは駆けだした。
フレッドは自分の担当である砲に向かい、コンスティチューションは船首に立った。
やがて、イギリス海軍フリゲート……『ゲリエール』が接近してくる。

……射程圏内に到達。
ゲリエールの砲から硝煙が上がり、砲弾が海面を叩いて水柱を作る。
しかし『コンスティチューション』艦長・アイザック＝ハルは、砲撃を待つように指示を出した。
２つの船はじわじわと接近する。
衝撃音と共に、『ゲリエール』の放った砲弾が、『コンスティチューション』の船体に直撃すした。
しかしその砲弾は側板に跳ね返され、船体は無傷だった。
『ゲリエール』側は驚愕し、逆にアメリカ軍の士気が大きく高揚する。

「この程度で、私を沈めることはできない」

コンスティチューションは不敵な笑みを浮かべる。
そして両艦の距離が僅か２３メートルに近づいたその時、ついにハル艦長は砲撃命令を下した。

「右、５度　！　用意　！」

砲の元で、フレッドが照準を指示する。
多数の砲が、『ゲリエール』を狙っている。

「発射（ファイア）　！　」

叫ぶと同時に、耳を塞ぐ。
刹那、轟く砲声。
熾烈な砲撃を加えつつ、『コンスティチューション』はゲリエールとの距離を詰めていく。

「……そろそろ、か……」

コンスティチューションは、片刃のサーベルを抜いた。
移乗攻撃の備えだ。
艦魂は船の守護神だが、人間に艦魂が手を下すのは禁じられている。
人間は人間、艦魂は艦魂同士で戦うのがルールだった。

衝撃音と共に、船体が接触した。
双方の海兵隊員達がマスケット銃を構え、敵の移乗攻撃を防ぐ。
その時、砲の所にいるフレッドが、肩を押さえてうずくまっているのが見えた。
流れ弾に中ったのだ。

「フレッド　！　」

コンスティチューションが駆け寄る。

「俺は大丈夫だ　！　行け　！　」

フレッドが叫ぶ。

「お前の役目を果たせ　！　行け、コンス　！　」

躊躇している暇も無い。
コンスティチューションは頷くと、甲板を蹴って跳躍した。
イギリス兵達には、鷹が獲物を狙って飛翔する姿に見えたかも知れない。
無論、艦魂の見える者かいればの話だが。
銃撃戦を交わす海兵隊員たちの頭上を飛び越え、『ゲリエール』の甲板に降り立つ。

「我はアメリカ海軍フリゲート、コンスティチューション　！　一騎打ちを望む　！　」

高らかに叫ぶコンスティチューション。
するとイギリス兵の中から、1人の少女が進み出た。

「イギリス海軍フリゲート、ゲリエール……受けて立つ」

短めの金髪をした少女……『ゲリエール』の艦魂は、自らの剣を抜いた。
細くしなやかなレイピアだ。
ほとんどの船員達は誰も気づかないが、既に両国の名誉ある者同士の戦いが、行われようとしていた。

「戦いが我らの宿命ならば、言葉は不要」

「何も語らずに、生死を賭けて刃を交えん」

「我は祖国アメリカのため」

「我は祖国イギリスのため」

作法に則り、２人は剣を向け合う。

「「いざ　！　」」

２人は同時に叫んだ。
ゲリエールが雷光の如く刺突を繰り出す。
コンスティチューションは流れるような動きでそれをかわし、サーベルで薙ぎ払う。
しかしゲリエールのレイピアが、蝶の舞うような軌跡を描き、受け流した。
船体が離れるが、それでも２人の戦乙女は戦い続ける。
それはあまりにも美しく、そしてあまりにも恐ろしい光景だった。
砲声の轟く中、剣光が交差し、金属音が鳴り、どちらかが倒れ伏すまで続く死の舞踏が行われた。

コンスティチューションの一撃がゲリエールの頬を掠め、髪の毛が数本宙を舞う。
バックステップをとったゲリエールが、即座に踏み込みつつ刺突。
刺突のみに特化した剣であるレイピアの切っ先が、コンスティチューションの喉を狙う。
今度はコンスティチューションが紙一重で交わした。
その時、離れていた船体が再び衝突する。
震動の後、再びマスケット銃による銃撃戦が交わされた。
それにより双方とも、敵船へ乗り移る兵士はいない。

「はあぁっ　！　」

コンスティチューションの連撃に、ゲリエールは後ずさる。
いける、とコンスティチューションは思った。

徐々に後退したゲリエールは、フォアマストに背中がぶつかった。
ちらりと背後を振り返り、ゲリエールは跳躍した。

（ここで跳ねるか……　！　？　）

コンスティチューションが刃を上に向け、斬り上げようとしたとき、
ゲリエールの足がマストを蹴った。
さらに身を捻って剣を交わし、コンスティチューションの斜め横に
着地する。

「なっ……　！　？　」

コンスティチューションの反応は、ゼロコンマ数秒遅れた。
かわそうとした瞬間、彼女の脇腹にレイピアが突き刺さった。
鋭い痛みに顔を歪める。

「……急所は外したか」

呟きつつ、ゲリエールがレイピアを引き抜くと、鮮血がほとばしった。
左手で傷口を押さえ、コンスティチューションは痛みをこらえて剣を振るう。

船体がまた離れて、熾烈な砲撃戦が行われた。
しかし『コンスティチューション』のライブ・オーク製の側板は、
『ゲリエール』の砲撃をことごとく弾く。
これこそ、この船が後に“古い鉄の船腹（オールド・アイアンサイズ）”と呼ばれる所以である。
艦魂の戦は、今度はコンスティチューションが追い詰められていた。
巧みな刺突を回避し、何とか反撃のチャンスを掴もうとする。

船体が、3回目の衝突をした。
だが今度は、今までとは様子が違う。
『コンスティチューション』の艤装が、『ゲリエール』の斜檣に絡まったのだ。
ゲリエールがそれに気を取られた一瞬の隙を突き、コンスティチューションの斬撃がゲリエールの肩を薙いだ。
ゲリエールが咄嗟に身を逸らしたため、傷は浅い。
そして次の瞬間、今までにない強烈な刺突が、コンスティチューションの左肩を貫いた。
ゲリエールは隙を作った自分に怒りを覚え、渾身の一撃を繰り出したのである。
しかし、コンスティチューションの左手が、レイピアの刀身を掴んだ。

「なっ……！？」

相手の武器の動きを封じたコンスティチューションは、最後の力を振り絞り、ゲリエールの首筋目がけて剣を閃かせた。

「……！！」

船上の一角が、赤く染まった。
コンスティチューションは肩を貫通したレイピアを、痛みをこらえて引き抜く。
その時、船体が離れ、『ゲリエール』の斜檣が『コンスティチューション』に引きずられた。
そしてめきめきという嫌な音がし始め、イギリスの水兵達が騒ぎ出した。
コンスティチューションは踵を返し、自分の本体へと跳躍する。
『ゲリエール』のフォアマストが、折れて倒れるのが見えた。

コンスティチューションが自軍の兵士達の元へ舞い降りた後、メインマストまでもが引きずり倒されていった。

「勝ったぞ　！　俺達の勝ちだ　！　」

「『コンスティチューション』は無敵だ　！　」

「アメリカに栄えあれ　！　」

狂喜する乗組員たちの中から、応急処置を受けたらしいフレッドが駆け寄ってきた。
肩に巻かれた包帯に、血が染みている。

「コンス　！　凄い怪我じゃないか　！　」

「大丈夫、私はすぐ治るから。貴方の方は　？　」

「弾が入らなかったから大丈夫だ。血が止まってないが……」

「なら動いちゃ駄目よ　！　じっとしてなさい　！　」

コンスティチューションは、たしなめるような口調で言う。

「ああ、すまねぇ。ただちょっと、心配だったからよ」

「全く、男って奴は……」

フレッドをその場に座らせ、『ゲリエール』の方を顧みる。
あの状態では、もう捕獲して曳航することすらできないだろう。

コンスティチューションは胸の前で十字架を切り、名誉ある敵の冥福を祈った。

……

「……下……閣下」

コンスティチューションは、はっと目を覚ました。

「そろそろ、お時間です」

目の前に立つ水兵が、言った。

「……ここは　？　」

「マーブルヘッドです」

水兵の答えを聞き、コンスティチューションは完全に夢から覚めた。

口に手を当て、欠伸をする。

「……久しぶりに、昔の夢を見ていた」

「戦の夢ですか　？　」

「ああ」

コンスティチューションは立ち上がり、部屋の外へ出た。

「さあ……行こうか」

……１９９７年７月２１日、母港ボストンの桟橋から、マサチューセッツ州マーブルヘッドまで曳航された『コンスティチューション』は、そこから自力で航海に出た。
乗組員の他に、アメリカ海軍関係者や政治家、ジャーナリストなどが乗船している。
水兵達がマストに登り、帆を張る。

「……出航」

船首に立ち、コンスティチューションは言った。
アメリカ海軍の守護神が、帆に風を受けて海上を走る。
１１６年ぶりのことだった。

「風の匂いも、随分と変わったものだ……」

彼女はその時、自分に近づいてくる２隻の艦に気づいた。
ミサイル駆逐艦『ラメージ』と、ミサイルフリゲート『ハリバートン』だった。

第2話　過去…米英の死闘（後書き）

……

フレッド
１８１２年のアメリカ海軍砲手。
『コンスティチューション』乗組員で、艦魂が見える人間だった。
先住民を迫害する国のやり方に反感を抱いていた。

ゲリエール
イギリス海軍フリゲート『ゲリエール』の艦魂。
レイピアの使い手。
１８１２年、コンスティチューションとの激闘の末、散る。

どうも、少し遅くなりました。
そして新年明けましておめでとうございます。
今回はコンスティチューションの過去の話でした。
次回、ラメージ達と出会います。

第3話　１９９７…守護神の憂い（前書き）

大変お待たせしましたー　！　！

いやもう、途中で詰まって詰まって……

第3話　1997…守護神の憂い

『ラメージ』の甲板に、2人の艦魂と、1人の人間がいた。

「ラメージ、参りましょう」

艦魂の片方が言った。
ラメージより幾分か大人びた風貌で、背も高い。
ミサイルフリゲート『ハリバートン』の艦魂だ。

「は、はい先輩。ううー、ドキドキする……」

ラメージは胸の高鳴りを鎮めようと、深呼吸をする。

「私も、緊張しています。数多の海戦を生き残り、合衆国海軍に勝利をもたらした女神……」

「なんか、ここからでもただならぬ気配が伝わってくる……」

そんな2人に、オスカーは語りかけた。

「ま、いい勉強だと思って、挨拶してこい。本当なら、俺も行きたいくらいだが」

ただ艦魂が見えると言っても、人によって度合いが違う。
オスカーの場合、艦魂の纏う力……東洋の言葉で言えば『気』までもを察知できるのだ。
大地の精霊達と共に生きてきた、先住民（ネイティブ）の血の名残なのかもしれない。

人間である彼にも、コンスティチューションという船からは、並の艦魂とは明らかに違う強い気が感じられた。

「ミス・ハリバートン、うちの娘を宜しくお願いします」

「心得ました、ボイントン軍曹」

「ちょっと、あたしいつから軍曹の娘になったのよ　！」

……そんなやりとりの後、ラメージとハリバートンは『コンスティチューション』の甲板へと、艦魂の力で飛んだ。

……

「……来たか」

甲板の上で、コンスティチューションは呟く。
船内には兵士たちの他に、政治家やジャーナリストなどが乗っているが、彼女の姿が見える者はいないようだ。
そして、彼女の背後に『ラメージ』『ハリバートン』の艦魂が、姿を現した。

「……コンスティチューション閣下」

ハリバートンが口を開く。

「護衛役を仰せつかりました、ミサイルフリゲート『ハリバートン』

でございます。ご挨拶に参りました」

「お、同じく、ミサイル駆逐艦『ラメージ』です。お、お、お会いできて、こ、光栄です」

ラメージもなんとか声を出した。

コンスティチューションは振り向き、微笑を浮かべる。

「護衛任務、感謝する。楽にするがいい」

優しげな微笑みに、ラメージの緊張は少し解ける。

同時に、コンスティチューションの『力』が、より強く感じられた。

その時、彼女たちの上空を、ネイビーブルーと黄色で塗装されたＦＡ－１８『ホーネット』が、６機で編隊を組み通過する。

「ほう……あそこまで綺麗に並んで飛べるのだな」

コンスティチューションが感心したように言う。

「彼らブルーエンジェルスは、世界最高のアクロバット・チームです。アメリカ海軍航空隊の最精鋭部隊と言っても、過言ではありません」

と、ハリバートン。

「昔なら、私も空を飛んでみたいと思っただろうな」

「昔……っていうと、戦っておられた頃ですか　？　」

ラメージが尋ねた。

「まあ、そんなところだ。あの頃の空は、今よりも広かった気がする」

飛び去っていくブルーエンジェルスに向かって、3人は敬礼を送る。コンスティチューションはラメージとハリバートンの本体を見やった。

「そなたらも、なかなか立派な艦だ」

「あ、ありがとうございますっ」

「身に余る光栄です」

「そう畏まるな。私もそなたらと同じ艦魂、しかも軍艦の性能としては、最早そなたらの足下にも及ぶまい？」

その言葉に、ハリバートンは首を横に振った。

「いいえ、貴女様は我々と違い、艦魂が直接戦っていた時代を知っておられます」

コンスティチューションが戦っていた時代では、戦闘員達が敵艦に切り込む際、艦魂も敵の艦魂と刃を交えていたのである。敵艦の船体に接弦しての移乗攻撃が行われなくなってから、艦魂はただ戦を見守るだけの存在となった。

「それに長い間、合衆国のために戦ったじゃないですか！　私たちみんなの憧れです！」

ラメージも言う。
緊張が解けて、今度はアメリカ海軍の守護神と対面しているということに、気分が高揚してきたのだろう。
「……確かにの……私は、合衆国のために戦った。しかし……」
コンスティチューションはふと悲しげな目をした。
それを見て、ラメージの顔が青ざめる。
「あ、あの……な、何か悪いこと……言いましたか？」
恐る恐る尋ねるラメージに、コンスティチューションは優しく笑った。
「いや、そんなことはない。ただ、最近思うのだ。……私が望んでいたのは、こんな国ではない、とな……」
その言葉に、ラメージとハリバートンは目を見開いた。
同時に、アメリカの命運が尽きたような気分にもなった。
アメリカ海軍の守護者たるコンスティチューションが、アメリカに失望しているのだから、その通りなのかもしれない。
「核、と言ったか。街一つ消し去る、煉獄の焔……。先の大戦の後、あれの標的として沈んだ艦の声が、聞こえてきたのだ」
「閣下……」
「ただひたすら、強い力を求め、その先に何がある？　正義だの、世界の警察だの、そんな理由を作り出して、この国はいつまで戦を続ける気なのだ？　私が生まれてから、２００年もの時が過ぎた

というのに。途方もない数の命が、散っていったというのに　！」

一瞬、彼女たちの間に、沈黙が流れた。

「……いや、すまぬな。そなた達に言っても、仕方のないことよの……」

苦笑するコンスティチューション。

ラメージは、自分の存在に疑問を持った。

所詮は兵器、所詮は人殺しの道具。

それはコンスティチューションも同じこと。

だが自分たちは、圧倒的に強力な破壊兵器を備えている。

コンスティチューションから見れば、船ではなく化け物かもしれない。

しかし。

（……この方には……まだ、私たちを見守っていてほしい……）

……そう願うラメージは、勇気を振り絞り、口を開いた。

「……閣下、私は……私は、自分に平和な世界を作る力があるなんて、思っていません。戦いの先に平和があるなんて、信じてません。けど、私に乗ってくれる人がいます。舵を取る人がいて、燃料を入れてくれる人がいて、口は悪いけど、よく励ましてくれる人がいて……上手く言えないけど、大勢の人達が、私を支えてくれるから……」

「……」

「国のためとか、正義のためとか、そういうの抜きにして……頑張れたら、いえ……一生懸命、生きていけたらいいな、って……思っています」

「……ふっ」

コンスティチューションは、ラメージの肩を軽く叩いた。

「……ありがとう。そなた君に会えてよかった」

心なしか、安堵したような表情で、コンスティチューションは言う。

「強い力を持っていれば偉い、などという考え方は、とうに限界がきておる。戦を終わらせるのは、心だということ……そなたらも、忘れないでおくれ」

「……はい」

「必ず」

……

……

…

「……どうだった、ラメージ　？　」

自分の本体に戻ってきたラメージに、オスカーが声をかけた。

「……凄く、綺麗な人だった」

「……そうか」

「あの人が安心して、私たちを見守ってくれるような平和な海を、守っていかないとね」

「ああ」

……彼女たちは、戦うために生まれた。

しかし、心を持つことを許された。

ある意味では、それも残酷なことかもしれない。

それでも、艦魂たちは生きる。

表向きは、国のために。

本当の心は、もっと大事な誰かのために……

エピローグ（前書き）

多少時事ネタを含みますが、大丈夫かなー、と。

エピローグ

……２００８年末……

「……ふむ、黒人が大統領に、のう」

新聞を眺め、コンスティチューションは呟いた。
傍らには、あの水兵もいる。
新聞は彼が持ってきたようだ。
そして部屋の壁には、記念航海の際の写真が飾られていた。
彼女の他に、ラメージとハリバートンの姿も写っている。

「私の時代には……いや、ついこの間までは、考えられなかったことよの」

「合衆国の歴史上、初めてのことですからね」

「白人、黒人問わず、この国が……そして歴史が、変革を望んでいるのかもしれぬな」

コンスティチューションは微かに笑った。

「そう、全ては変わっていく。国も、人もな。かつて、私と共に生きた者達が夢見た、本当の自由の国も……遠くないやもしれぬ」

コンスティチューションは新聞を几帳面に畳んだ。

「いつも、すまぬな」

「いえ、構いませんよ、閣下。私は艦魂のことを、もっとよく知りたいので」

「ふふ、いつの時代にも、そういう若者はおるのだな。嬉しいことだ」

「では、失礼します」

水兵はサッと敬礼をすると、退室していった。

1人になった部屋で、コンスティチューションは目を閉じた。

世界は目まぐるしく変わり、

海も、船も変わっていく。

彼女にはもう、変わることは許されないのかもしれない。

しかし、彼女の名が、海に残る限り。

戦いの記憶が、忘れられない限り。

……“古い鉄の船腹（オールド・アイアンサイズ）”は永遠に、この海を見守るだろう……

……fin…

エピローグ（後書き）

絹海「こんにちは、伊四〇〇潜水艦艦魂、絹海です」
小夜「夜間戦闘機『月光』の小夜です」
コンスティチューション（以下コンス）「よく来てくれた。私がコンスティチューションだ」

絹海「ところで、作者さんが先に来ているはずなのですが……」
コンス「先ほど、うちの艦魂たちに連行されていった」
小夜「あちゃー。1ヶ月軽く超えちゃったから、そりゃアメリカの艦魂たちも怒るよね」
コンス「特に、待つのが嫌いな国柄だからな……」

耳を澄ませば微かに流水郎の悲鳴が聞こえてくる……

絹海「と、とにかく……コンスティチューションさんは愛された船だったんですね」
コンス「はは、それなりには、の」
絹海「あっ、それと……私の話では、手紙を預かってくれて、ありがとうございます」
コンス「気にするな、艦魂に国籍など関係ない」
小夜「さらりとそう言えちゃうところも、やっぱり２００年生きた度量の大きさ……　？　あ、ちなみに上の話については、『伊四〇〇一為せる全てを一』を読んでね♪」
コンス「度量というより、どうでもよくなってしまったという方が正しいな。あまりにも目まぐるしく世界情勢が変わるものでの……私が血みどろになって戦ったイギリスも、二次大戦では同盟国だった。そのようなわけで、敵国とかそういう言葉自体が無意味に思えてきたのだ」

小夜「……なるほど。でもそれも凄い……」

絹海「それにしても今回は、遅すぎましたよね」
小夜「そうだよねぇ」
コンス「次は短編にするらしいがの」
絹海「えっ、そうなんですか　？　」
コンス「うむ、日本海軍最初の航空母艦の話と言っていたが」
小夜「日本最初の航空母艦……　？　あのひねくれ者の作者が、素直に『鳳翔』を書くとは思えない……」
絹海「あ、私、なんとなく分かったような……」
コンス「他に考えている話では、東郷平八郎が登場するそうだが」
小夜「それも、あのひねくれ者の作者のことだから……」
絹海「……素直に日露戦争を書くとは思えませんね」

コンス「さて、そろそろ作者を助けに行ってやらねばの」
小夜「作者は変なところでしぶといから、多分生きてるとは思うけど……」
絹海「それでは、この辺でお開きということで」
コンス「読んでくれて感謝する。ミス・ミカサに会ったら、宜しく伝えてくれ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7725f/

艦魂異聞禄　～Old Ironsidesの名を冠する帆船～

2010年10月10日02時06分発行